

ジョアシャン・デュ・ベレーの『哀惜
詩集』 *Les Regrets* 研究

高 田 勇

*Etudes sur Les Regrets de Joachim
du Bellay*

Isamu TAKATA

ルカ、アリオストからとったイメージや思想を初め、今後解明につとめたいものが数々残されている。

ジョアシャン・デュ・ベレー（1552—1560）の詩集中で最も有名で、最も優れた詩集と言われる『哀惜詩集』*Les Regrets* は1558年にバリのフレデリック・モレル書店から出版され、アヴァンソン侯ジャン・ド・サン＝マルセルに献呈されている。

ジョアシャン・デュ・ベレーは1553年6月ローマに到着し、1557年8月までこの地にとどまることになる。父の従兄弟にあたるジャン・デュ・ベレー枢機卿（1492—1560）がアンリ二世の命によって教皇ユリウス三世のもとへ派遣されるにあたり、そのお供をして憧れの地イタリアへ来たのである。ジャンはラテン詩の著者でもあり、『フランス語の擁護と顕揚』（1549）の献辞のなかで称賛されている人物である。

ジョアシャンにとってはローマの生活は期待に反して幻滅の連続であった。故郷のフランスで栄光の詩の道を歩む盟友ピエール・ド・ロンサール（1524—1585）を首領とするプレイヤー派の詩人たちと自分自身を較べて、自分を「追放者」になぞらえ、同じような境遇から生れたオウィディウスの『悲嘆の詩』*Tristia*（8—12）を手本にして『哀惜詩集』を書く。

この『哀惜詩集』という名称は191編のソネのうちの最初の49編の哀歌群には見事にあてはまるが、残余の作品には風刺詩や賛歌も多くて、必ずしも全編にわたって適切な題名ではない。しかし、フランス宮廷、国王、王妹マルグリット夫人、これまでの自由独立の身を枢機卿の雑務係という隷属の身と交換したこと、うまし故郷アンジュー……等々のあらゆる *regrets* が詩人に深いメランコリックな調子を生み出させている。「16世紀のフランス詩には『哀惜詩集』ほど独創的なものはない」とJ・ヴィアネーは『16世紀フランスのベトラルクスム』で言っており、A・ボーフィレをはじめ多くの研究者もこの詩集を「ソネで書いた日記」と絶賛しているが、事は必ずしも単純ではなく大いに研究の余地がある。先ず問題になるのがユマニスムとイタリアニスムの問題である。ホラーティウス、ウェルギリウスへの暗示、ペトラ